News & Topics

音楽監督ジョナサン・ノット

2018年度 シーズンを語る。

Jonathan Nott &
Tokyo Symphony Orchestra

SEASON 5

all photos by T.Tairadate.

2017年10月17日（火）、いつもはオーケストラのリハーサル会場として使用している東京交響楽団クラシック・スペース★100（東京・大久保）で、2018年度シーズンラインナップ記者会見を行いました。専務理事・楽団長の大野順二の挨拶に続き、音楽監督ジョナサン・ノットが任期5年目となる新シーズンへの抱負を述べました。

音楽の経験を皆と共有したい

「指揮する／conduct」の語源はラテン語の「共に導く」。指揮者はあくまで引っ張る存在であって、尊敬する演奏家たちを決まった箱の中に押し込むようなものではありません。共演を重ねるごとにオーケストラから音楽性や自由さがますます自発的に現れてくる。そうしたことに私は指揮することの喜びを感じています。

2018年度も楽団員とより多くの経験を共有できるように、異なる様式、異なる演奏法、異なる時代の作品をたくさん集めました。音楽的な経験を豊富にすることによって、お客様が音楽の旅に出るときの道しるべになれたらと考えています。

東京という音楽都市

東京はクラシック音楽にとって最重要地の一つです。これほどの数のオーケストラがある都市はまず他にありません。東京の聴衆の皆さんのあたたかさや知識、そして真摯な聴き方に感激しています。

私は25年間ヨーロッパで仕事をしてきましたが、オーディションを受ける日本人の数は徐々に増えてきていて、世界のクラシック音楽界のエネルギー源になっているのではないかとさえ思うほどです。ドイツでは「オーケストラや劇場がある風景」というものを評価してUNESCOの無形文化遺産に登録しようという動きがありますが、私は東京についてもそれは言えるのではないかと思います。

マーラーとブルックナーの「未完成」（4月）

指揮者はブルックナー派とマーラー派に分かれるものですが、両者を一度に取り上げるのはどうだろうかと考えました。これは私としても初めての試みです。今回取り上げるのはどちらも未完の作品。遺作には迫り来る次の世界の気配を感じるから好きなのです。

マーラー**《交響曲 第10番》アダージョ**は、前作の《交響曲 第9番》を経て初めて演奏できる作品と考えています。過去の演奏経験によって作品に照らされる光は違って見えるもので、だからこそ文脈や順序にはいつも気を配っているのですが、実は今、この2

曲をどちらの順で演奏しようか迷っています。普通であればマーラーのアダージョ、休憩、ブルックナーの**《交響曲 第9番》**という順番でしょうか。ですが、ブルックナーの後に2分間の静寂があり、それからマーラーに移行するのも良いかもしれません。

こども定期演奏会に初登場（4月）

シューベルトはオーケストラにとって重要な作曲家。**《交響曲 第6番》**は、作曲当時イタリアが大流行していたということでロッシーニと組み合わせてみました。今回は楽団員をソリストとして迎えて**《ファゴット協奏曲》**を演奏しますが、この2曲はこども定期演奏会でも取り上げるので、そちらも楽しみです。

ところで東京交響楽団は「マエストロ・シート」という取り組みを行っていて、演奏会の休憩時や終演後に子どもたちが楽屋を訪れます。私は次世代の音楽ファンにも手を差し伸べなければならないと思っていますので、こうした活動は重要と考えています。

エルガー《ゲロンティアスの夢》（7月）

イギリス人であるにも関わらず、実はそれほどイギリスの作品を指揮していません。それはドイツやフランス、ロシアや日本などに素晴らしい作品が数多くあるからというのもありますが、身近な音楽であるがゆえに敬遠していたのかもしれません。

私は歌から音楽の世界に入りました。少年の頃はエルガーの故郷ウースターの聖歌隊で歌い、8歳から10歳ぐらいまでの間にこの**《ゲロンティアスの夢》**はかなりの回数聴いたものです。私はそれほど歌が上手くなかったため指揮者になったのですが、東京交響楽団には東響コーラスという素晴らしい合唱団もありますので、そろそろ腹をくくってエルガーに挑もうと思います。

有名なのに演奏してこなかった作品（11月）

それから、人気が高いもののあまり演奏していない作品も取り上げます。ラフマニノフの**《交響曲 第2番》**はメランコリーな悲しみの部分が大好きで、**《アイネ・クライネ・ナハトムジーク》**は近年では殆ど全曲は演奏されませんが、実は非常に難しい作品なのです。ベートーヴェンはこれまでにも取り上げてきましたが、今回の**《交響曲 第4番》**も素晴らしいものになることでしょう。これをモーツァルトとストラヴィンスキーを組み合わせるのも面白いと思います。

ラフマニノフと一緒に演奏するブラームスの**《ピアノ協奏曲 第2番》**は、ソリストにヒンリッヒ・アルパースを招きます。彼と初めて出会ったのは6、7年前のこと。「あなたのために弾かせてほしい」とアプローチがあってバンベルクで会うことになったのですが、広いホールに2人っきりで聴いた彼の繊細な演奏は突き抜けるほど素晴らしく、ぜひ共演したいと思いました。もちろんソリストを選ぶ際には有名な演奏家を選択するという方法もありますが、私は自分の心を動かした人こそを選びたい。また、2018年度は東京交響楽団の楽団員にもソロを多く演奏してほしいと考えています。この作品も第2楽章はほとんどチェロ協奏曲のようなものです。

ヴァレーズとR.シュトラウス（12月）

12月のヴァレーズと**《英雄の生涯》**も、楽団員の個々の演奏が際立つプログラムだと思います。2017年10月には「1928年」を軸にしたプログラムを組みましたが、ヴァレーズの作品もこの時代の前後。ヴァレーズの音に対する純粋さはハイドンに近く、また不協和音や半音の使い方は心に訴えかけるものがあって大好きです。若い頃にはアムステルダムでリゲティ、ヴィヴィエらの作品とともによく指揮したものです。音を混ぜたり大きさを変えたりするのは非常に面白く、**《アメリカ》**も最初はアルト・フルートのソロで始まりますが、どんどん拡大して大きな曲になっていきます。

私にとって現代音楽は、まるで日本人にとっての「お米」のように不可欠なものですが、どの曲もテーマの中に組み込むのであって、ただ取り上げるということはありません。聴きやすい2曲の間に難解な現代音楽を無理に挟むという手法も好きではありません。

どういう音をどの作品で使うか。曲ではなく、音でどのようにストーリーを語るか。そうしたことを私は常に考えています。例えば、東京交響楽団にもより深い音を要求しますが、バスから始まるような土台のしっかりした音を求めれば、R.シュトラウスに最適な音が出来上がるのです。

同じ時代でなくとも共通する世界観を持つ曲の組み合わせがあり、あるいはR.シュトラウスやマーラー、ブルックナーやエルガーなど様々な音の世界

が交錯することによって不思議な感覚が生まれます。その印象や時代性――そうしたものをお客様にも楽しんでいただければと思います。

音楽はストーリーを語らなければいけません。私たち音楽家は作曲家が既に他界していたとしてもそこに生命力を吹き込み、いま生きている人のためにこそ語らなければならないのです。

■2018年度 定期会員券　好評発売中
■2018年度 選べるプラン・1回券
東響会員先行発売…2017年11月28日（火）
一般発売…2017年12月5日（火）